

日本フィル「被災地に音楽を」訪問コンサート レポート <第36号>

*被災地支援の訪問演奏は、2011年4月から2016年8月末までで通算197回となりました。

2017年1月

発行：(公財)日本フィルハーモニー交響楽団 〒166-0011 東京都杉並区梅里1-6-1 TEL 03-5378-6311 FAX 03-5378-6161

8月の下旬、日本フィルメンバーが宮城県山元町と名取市を訪れました。

8月26日(金)

山元町 花釜区交流センター コンサート

8月27日(土)

山元町 山下中学校・坂元中学校 クリニック

山元町 子どもセンター コンサート

8月28日(日)

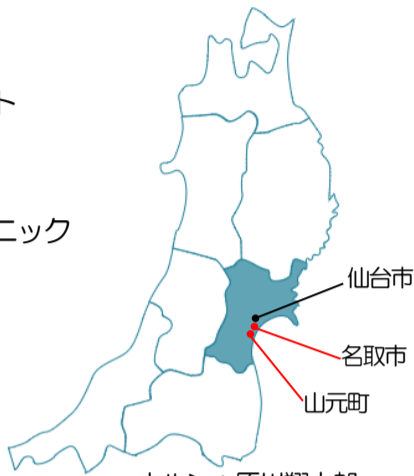
名取市 増田児童センター コンサート

トランペット：太田恭史(賛助) / 中里州宏

トロンボーン：岸良開城 チューバ：黛拓朗(賛助)

ホルン：原川翔太郎

打楽器：福島喜裕



「大きな絵をみんなでかこう！」のイベントで2年前に子どもたちが描いた絵の前を、みんなで行進!

8月26日

酷暑の東京を出発し、8月26日の昼下がりには宮城県は山元町へやってきました。仙台市から車で1時間ほど南下した沿岸部、震災後津波の大きな被害を被った地域です。今年の春に再建されたばかりの花釜区交流センターに到着。途中、かつて常磐線の駅があった場所を通りました。今では駅舎はその役目を終え、駅前商店の看板にかつての面影を見つけるだけです。

あいにくの曇り空で今にも雨が降り出しそうな空模様のなか、日本フィル楽団員とスタッフ、それに三菱UFJニコスさんのスタッフの総勢8名がマイクロバスで到着しました。迎えてくださったのは、町のお世話役、区の方々など。あたたかいおもてなしと笑顔にほっと一息つきます。まわりは津波ですべて流されてしまい、残ったところに草が生え放置されているような土地もまだ多く、その中に新しい家がぽつぽつと建っている状況です。今回コーディネーター役を担ってくださった方は、震災後、人びとの心を癒すお地藏さん作りの活動をボランティアで続けていらっしゃる地元の方。無心に粘土をこねて、鎮魂の思いを込めて作られた何十、何百ものお地藏さんを沿岸部の普門寺に奉納しているのだそうです。その方とのご縁もあってこのコンサートが実現しました。日本フィルの被災地支援活動は福島・

宮城・岩手の東北3県を中心に訪れていますが、人と人のつながりご縁で毎回の訪問地が決まっています。会場を訪れるというよりは、その土地の人びとに逢いに行く感覚を持っています。

コンサートは夕方16時開演。15時を過ぎると、どこからか次々と車がやってきて広い駐車スペースを埋めてゆきます。口々に近況を語り合う様子にこちらでも自然と笑顔がこぼれました。東京からボランティアでやってきて普門寺に合宿している大学生も大型バスで到着し、小さな集会場は満員に。一曲目、トランペットの音色が鳴り始めた瞬間から小さな会場はプラスのハーモニーで満たされます。開いた窓から、遠く空へ海へと昇っていく音をぼうと聴きながら目を閉じると、自然と祈りの感情が湧いてきました。一転、曲が終わりトランペット中里が話し始めると、とたんにアットホームな雰囲気。彼の人柄もあって、冗談を交えながらの進行に温かい雰囲気につまれます。お客さんとの会話ははずみ、初対面でも、異なる背景を持つもの同士でも、不思議と音楽のちからで心が通い合います。演奏会が終わった後には興味津々のお客様を相手に即席の楽器解説。訪れた子どもたちは大きなチューバにさわって少しだけ持ち上げてみました。その重さにびっくり!目を丸くしていました。



終演後もお話しは尽きません。

8月27日

二日目はクリニックからスタート。山下中学校へ隣の坂元中学校からも生徒がやってきての合同クリニックです。会場となった山下中学校は震災後、避難所として使われていました。普段は違う学校に通う生徒たちが同じ部屋で並んで指導を受けます。楽員たちの温かくも厳しい指導に、真剣なまなざしでついていっていました。こうやって音楽に打ち込める瞬間を大切に、作ってあげるのが私たちの役目でもあります。



上は打楽器福島、下はトロンボーン岸良の指導風景。



お昼前に指導を終えると、マイクロバスに乗り込み山元町に新しくできた子どもセンターへ向かいます。ここは震災後に新設移転された小学校と保育所が並び一角に作られた複合施設。まあいい屋根をもち、壁がガラス張りになった開放的な建物です。震災後避難した人びとが色々な事情で町に戻ってこれないという現実。子育て世代の流出を食い止め、山元町が子どもたちにとってのふるさとであり続けるように、そんな強い思いが込められた町の新しいランドマークです。



子どもセンター外観

右の写真は先に会場入りした女子美術大学 OMODOC (オモドック) の皆さん。かわいらしく飾りつけされたスペースでは持参のスピーカーから音楽が流れ、おめんや楽器を作るワークショップでにぎわっていました。こうした場の雰囲気づくりにも工夫を凝らしているそうです。きらきらしたモールやビーズ、紙などを材料にマラカスや太鼓づくりに没頭する親子連れの皆さん。あとからやってきた中学生たちも混ざります。工作をしながら、親と子、子ども同士、中学生のお兄さんお姉さんと小さな子どもたち、教えたり教えられたりとの交流が深まります。



東北の子どもたちの元気のよさ、発想の豊かさに驚きました！



みんな創作に夢中！

山元町で災害時臨時FM ラジオ局をやっている方も会場にいらっしゃいました。今回訪れる前にラジオでコンサートの紹介をしてくださったのです。その時はトランペットの中里が電話出演というかたちでお話しさせていただいたのでした。このラジオ局は、震災直後に情報が全く入らない状況にあって、元アナウンサーの方のついで新潟からラジオの機材を送ってもらい、それがわずか3日という速さで山元に届き、何と3月21日に立ち上げた局なのだそうです。

コンサートは打楽器ひろばとプラスコンサートの二本立て。打楽器・福島が黒いポストナックを手に見ると・・・中から楽しい打楽器が次々に登場！締めにはクラッピング・ミュージックで会場の皆さんと一緒に盛り上がりました。プラスコンサートではとなりのトトロなど、みんなで口ずさめる曲を中心に演奏。みんなで一緒に行進しよう！と「さんぽ」に合わせて手づくり楽器を鳴らす音楽隊も登場。OMODOC の皆さんの先導で元気よく会場内を練り歩く子どもたち。一つの思い出として心に小さく残ってくれると嬉しいです。

この山元町を日本フィルメンバーが訪れるのは初めてですが、以前から三菱UFJニコスの社員ボラ

ンティアの皆さんが町の皆さんとの交流を深めてきた経緯があります。2014年には日本ユネスコ協会連盟の協力も得て、親子ふれあいイベント「みんなで大きな絵をかこう！」を開催。《未来の山元のまち・夢のまち》をテーマに完成した24枚の絵が繋ぎ合わされ、参加者の思いが詰まった巨大な「夢のまち」が完成しました。この絵が、このたび完成したこどもセンターに飾られる予定で大切に保管されてきたのです。

役場の若手職員の方々が、センターの開所に奔走しやっと迎えたこの夏。真新しいセンターがまちの未来と日本フィルの奏でる音楽で満たされました。



子どもたちが描いた絵には明るい未来が詰まっています。

8月28日

三日目の朝、一行は朝市が開かれているという情報を聞いてゆりあげ港へ。「閑上(ゆりあげ)を元に戻すだけでなく、東北一の人びとが集まる観光地にしたい」という地元の方々の熱い思いで昨年から再開された地元の朝市です。ちょうど到着した頃には地元のバンドや東京からやってきた高校生吹奏楽部の演奏があったりと、市場の盛り上がりは最高潮。新鮮な魚介をあぶる芳ばしい香り、次々と差し出される海産物の試食。がごめスープをいただき心も体もあたたまりました。

名取のホテルからタクシーで15分ほどの道のりでは、運転手さんが被災当時の様子を語って聞かせてくれました。地面をまるごと約4メートルかさ上げしている工事現場も通り、この目で復興の足取りの確かさと、道のりの長さを同時に感じました。写真は港から海を臨む風景。美しい景色、でもこの海が、と考えると初めて訪れる者には複雑な気持ちにさせられる景色でした。

さて、お腹をすかせたメンバーは海鮮丼で朝からエネルギーチャージ！地元の人びとの復興にける思いとパワーを肌で感じたところでホテルへと戻り、最後の会場へ向かいます。



朝市は大勢の方でにぎわっていました。

最終日の会場は、名取市増田児童センター。精力的にイベントを企画する館長さんのもと、子どもたちがのびのび過ごせるスペースになっています。こちらの館長さんは、もともと保育士をなさっていた方。子どもたちと大人との距離が近く、子どもが一人でも安心して気軽に遊びに来られる施設になっています。

午後になり集まってきた親子連れの中には生後8ヶ月のお子さんを連れてお母さんもいました。「こんな近くで日本フィルの演奏を聴けるなんてほんとなかな？と思いつながら来ました。」とニコニコしながら入ってこられました。

この日も、OMODOC の皆さんは早くから会場入りしてワークショップ。彼女たちは「ヒーリングアート」という分野を学びながら、それを社会に生かすべく様々な活動にチャレンジしています。

OMODOC とは、震災によるストレスをアート活動を通してケアすることを目的に結成された、《アートによる被災地のこども支援プロジェクト》。日本フィルの本拠地・杉並区での地域連携の一環で、区内にキャンパスのある女子美術大学と活動を共にしています。

ワークショップで作った楽器やお面を身につけて、準備万端！コンサートの始まりは子どもたちの行進から。もじもじドキドキしていた子どもたちも、親御さんや近所の大人たち、センターの職員の皆さんが手拍子で盛り上がるなか元気に行進しました。ニコニコ笑顔を振りまく子、自作の太鼓をたたくのに夢中になっている子・・・未来を担う子どもたち一人一人にこれからも優しいまなざしを注ぎ続けていきたいと強く思いました。



できたよ！ハンドバック型のマラカスを両手に♪

あの震災から5年半。私たちの記憶は鮮明さを失い、現地を訪れる支援活動も少なくなってきたと聞きます。今、そしてこれから私たちにできることとは何なのでしょう。大きな悲しみを背負ったその土地で、こうして人々が集まって再び笑いあう。この小さな火をひとつ、またひとつ灯し、それが消えないよう大切に守りつづけることが私たちにできることなのかもしれません。日本フィル「被災地に音楽を」は、これからも音楽を届け続けます。